

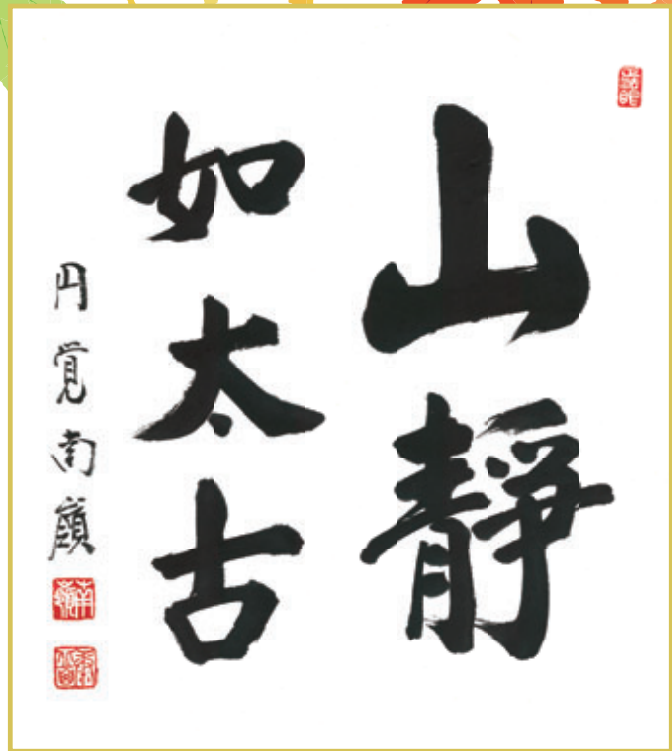


円覚 339号(秋ひがん号) 令和4年9月1日
編集発行 円覚寺派宗務本所
〒247-0062 鎌倉市山ノ内 409
TEL : 0467-22-0478
FAX : 0467-23-3027

円覚寺ホームページ



<https://www.engakuji.or.jp/>



円覚339号 目次

横田管長のお話	
「大いなるいのち」	1
管長のページ	8
信心ことはじめ③⑧	10
鈴木大拙の言葉と生涯(八) / 蓮沼 直應	12
直感的に感じる心 [後編] / 桜井竜生	16
円覚寺の至宝④	20
精進料理レシピ / 藤川 譲治	22
お彼岸、どう過ごす? / 横山 友宏・由馨	24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

横田管長のお話

大いなるいのち

落語の「寿限無」という話があります。よく知られているものです。生まれた子どもがいつまでも元気で長生きできるようにと考えて、とにかく「長い」もの、縁起のいい言葉を並べていって、とんでもない長い名前を付けたという笑い話です。子どもが音読などでも習うらしく、今も多くの方に親しまれています。そのはじめに「寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ…」と続きます。「寿限無」は文字通り、限りの無い寿命のこ

とであります。子がいつまでも長生きしてほしいという願いそのものです。その次が「五劫の擦り切れ」であります。これは「劫」という仏教で説く長い時間のことを表しています。

「劫」という言葉を『仏教辞典』(岩波書店)で調べてみると、「サンスクリット語kalpaに相当する音写」とあって、「カルパ」という言葉の音をあてたものだわかります。そしてそれは「古代インドにおける最長の時



間の単位」だというのであります。

『雑阿含經』に芥子劫と磐石劫という喩えがあります。四方と高さが一由旬の鉄城があるといいます。一由旬はおよそ七キロメートルです。その中に芥子を充満し、百年に一度、一粒の芥子を持ち去って、すべての芥子がなくなったとしても、まだ劫は終わっていないというのであります。これが芥子劫です。

また、四方一由旬ある大きな岩山があって、ある人が薄い布で百年に一度すつとその岩を払うのであります。その結果、その大きな岩山が完全に擦り切れてなくなっても、劫は終わっていないというのです。これが磐石劫なのです。

どう考えても岩が擦り切れてなくなるよりも、先に擦り切れてなくなるのは布の方

だと思うのですが、とてつもなく長い時間だということでしょう。

芥子粒の喩えなら、まだ計算が可能で、実際に一辺七キロメートルの箱に芥子粒の直径を〇・五ミリとして計算した方もいますが、とてつもない数字となっています。

こんな「劫」という長い時間をどうして仏教は説くのか不思議でなりませんでした。どうにも空想のようにしか思えませんでした。長年前管長の足立老師にお仕えしてきて、ある時老師は、このような長い時間を説くのは、お互いのいのちの長さを表しているからだと教えてくださったことがあります。

お互いのいのちというのはそんなに長いものなのかと、感動を覚えたものでした。「劫」の長さについて『仏教辞典』には、

「梵天の一昼、つまり半日の長さを一劫ともする」という説もあり、実に「その長さは、人間の年に換算すると四十三億二千万年に相当する」と書かれています。四十三億年というとまだわかりやすい気がします。そして四十三億年という数字を見て思い出しましたが、この地球ができてからの長さのこととあります。

この地球ができたのは、およそ四十六億年前であるといわれています。一劫が四十三億二千万年というのと少し近いような気がしたのであります。





ご縁があつて、近藤瞳さんという方の「地球を生きるワークシヨップ」というのに参加させてもらったことがあります。僧堂の雲水たちと一般の方もまじえて一緒になって学んだのでした。

そのワークの題が「地球四十六億年を感じる旅」というものです。

何をするかというと、円覚寺周辺の山道四・六キロを、地球四十六億年に見立てて近藤瞳さんと一緒に歩くのです。

これは近藤瞳さんが、二〇一六年、イギリスのシューマツハカレッジで体験したディープタイムワークをベースにして、近藤さん独自の体験談・哲学・心理学など、あらゆる視野を投入して創作されたものだそうです。

この学びを通じて、「今生きることが、自

分が存在することが、どれだけ奇跡に溢れているのか」を実体験してゆくのです。

ワークは「地球の歴史だけではなく、宇宙の誕生(百三十八億年前)から」話が始まりました。そして歩きながら、今に至る地球四十六億年の歴史を辿る旅を約四・六キロの距離になぞらえて、歩きながら行つたのでした。

円覚寺の裏山は六国見山というところで、小高い山になっていまして、そこを皆で歩いたのでした。歩くのに際して、近藤さんは、裸足で歩くといひですと仰いました。そこで皆裸足になっていました。

四十六億年を四・六キロで歩くというと、一歩がなんと五十万年に相当するのだそうです。このわずかな一歩が五十万年だと思つて歩くと重みを感じます。

よく地球カレンダーというものを耳にし

ます。地球四十六億年を一年三百六十五日に見立てて説明しているものです。

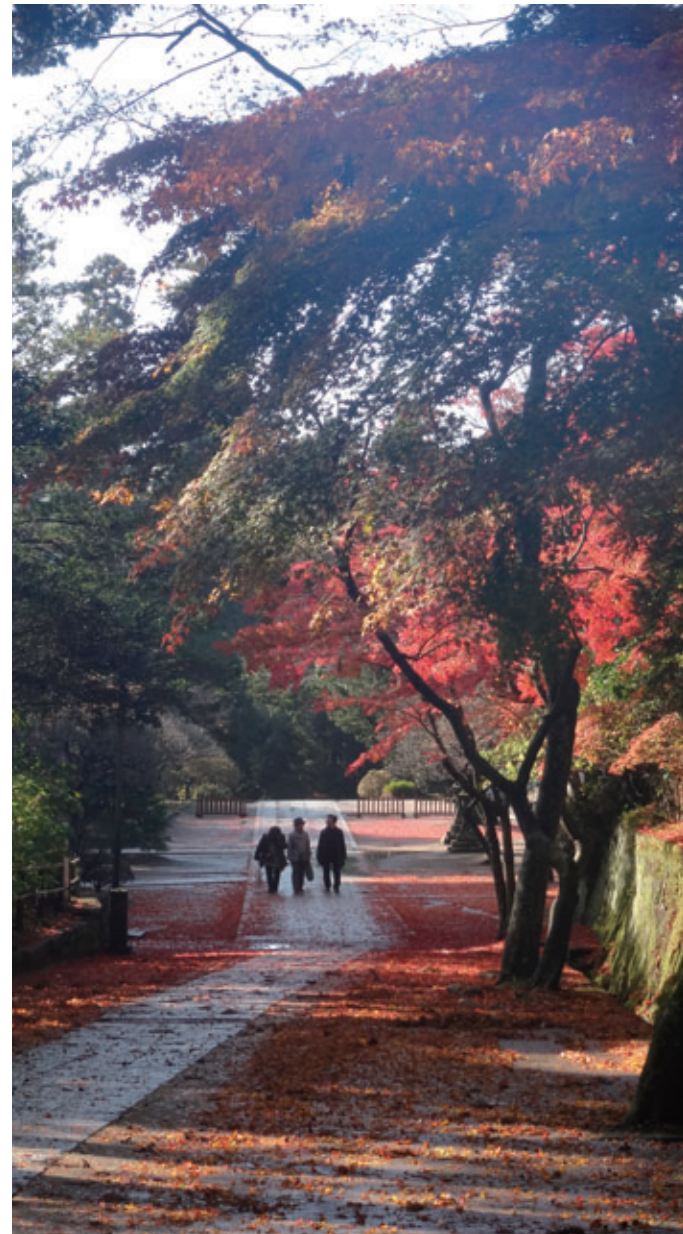
地球ができて一億年が経つた頃、地球カレンダーでいうと一月十二日に月と地球が別れたというのです。これも大きい隕石が衝突したからだそうです。衝突、破壊から再生が始まるのだということでした。地球の歴史は、この破壊と再生の繰り返しなのだそうです。

地球カレンダーの二月二十五日、最初の生命が生まれました。微生物だそうです。微生物は私たちの原形のようなものですから、これと今も共存して生きているのです。

五億年前にあたる十一月二十日、生物が多様化して魚類が現れました。十一月二十八日頃、魚類から両生類が別れて陸にあらようになります。

十二月十三日、新たに現れてきた恐竜の

時代になりました。十二月二十七日あたりから哺乳類が繁栄し、十二月三十一日になってようやく人が現れたというのです。実に人間などというのは地球上では新参者なのです。今の人、ホモサピエンスが現れたのは三十一日の午後十一時四十分頃なのだ



そうです。

午後十一時五十八分五十二秒から農耕牧畜が始まり、五十九分五十六秒でルネッサンス、五十九分五十八秒で産業革命、地球カレンダーではたった二秒でこれだけの産業を発達させたのです。

近藤さんは長い長い宇宙の営み、地球の歴史の末に今ここに生きているということは、それ自体が奇跡なのだと教えてくれました。いのちの長さというお互いが誕生してから何十年と数えますが、四十六億年の歩みの上の数十年なのであります。実にこのいのちの長さを仏教では「劫」という単位で示してくれていたのです。

こんな深いいのちの感動をもって毎日を生きてゆきたいものです。自分なんてつまらないなどと思ったらバチが当たる気がします。武者小路実篤さんの言葉に、「一番深いところからくる 純粋な喜びを感じつつ

毎日の仕事を悠々とやっていきたい
まず自分のすることをして 今日も無事に有益に 一日を過ごせたことを 心ひそかに 喜びたいと思う」とあります。そん

ないのちの感動と喜びをもって自分の勤めをなしたいのです。

それから近藤さんは、裸足で歩く速さが本来のペースだと教えてくれました。裸足で歩くとそんなに速く歩けません。一歩一歩足もとを見てしっかり地に足をつけて歩きます。

そして大事なことは、地球上にあるものはみんなもともと一つのものだということです。自分だけでなくあらゆるいのちあるものは、皆同じいのちの長さをもって生きているのです。そう思うと自然と慈しみの心がわいてきます。

時には空を仰いだり、山を歩いたりして大いなるいのちを感じてみたら如何でしょう。小さなことに悩むことはない気づくはずです。